

血液型性格論についての研究

0807076

柳谷 美香

【目的】

血液型性格論の歴史を振り返って見ると、古川（1927）の学説が元となり、マスメディアの影響力によって広まったということがわかった。現在では、TV・雑誌の占い、友人との雑談など、私たちの生活において、ひとつの文化のように深く浸透しているという印象を受ける。

では、なぜ私たちは血液型性格論を支持してしまうのであろうか。

上瀬・松井・古沢（1991）は、血液型ステレオタイプの強さと社会的外向性、自己意識特性、自己確認欲求との間に相関がみられたという。また、岩井（1994）の研究でも、血液型性格判断を信用する者と公的自意識、親和欲求、追従欲求、運命信望の4つの人格的特徴との間で有意な相関係数が得られている。

本研究では血液型性格論を支持する人は、人付き合いや他者との関係を円滑に進めるために他者に気を配ったり規範や話題に合わせたりしようとする傾向にあると仮定し、血液型性格論を信じる人は公的自意識が高いかを検討する。

また、公的自意識と関連があるとされている対人不安意識との関連についての検討も行い、対人関係、社会的場面での血液型性格論を信じる人の傾向について考察を行う。

【方法】

北星学園大学に在学中の大学生120名（男性53名、女性67名）を被験者として調査を実施した。

公的自意識についての質問には、菅原（1984）の自意識尺度を使用した。この尺度はFenigstein, Scheier, and Buss（1975）らが作成した自意識の強さの個人差を図る尺度の日本語版であり、私的自意識、公的自意識の2つの因子から成り立つ26項目から成る。各項目に対してどの程度当てはまるかを5件法（1.そう思わない～5.そう思う）で回答させた。

対人不安意識についての質問には、堀井・小川（1997）の対人恐怖心性尺度を使用した。こ

の尺度は堀井・小川（1996）の対人恐怖心性尺度を再構成したものであり、対人関係における不安意識とそれに随伴しやすい否定的自己意識から構成され、6つの下位尺度を持つ。6つの下位尺度とは、自分や他人が気になる悩み（尺度Ⅰ）、集団に溶け込めない悩み（尺度Ⅱ）、社会的場面で当惑する悩み（尺度Ⅲ）、目が気になる悩み（尺度Ⅳ）、自分を統制できない悩み（尺度Ⅴ）、生きることに疲れている悩み（尺度Ⅵ）である。今回は、菅原（1984）に倣い対人関係における不安意識の3つの尺度（尺度Ⅱ、尺度Ⅲ、尺度Ⅳ）を使用し、各尺度5項目、全15項目に7件法（0.全然あてはまらない～6.非常にあてはまる）で回答させた。

【結果と考察】

血液型性格論を信じる人と公的自意識の強さの間には関係があることが認められた。また、公的自意識と対人不安意識との間に相関係数が得られ、2つの仮説は支持された。

この結果より、他者との関係を円滑にするために血液型性格論が用いられている背景には、どこかに人付き合いへの苦手意識があり、血液型性格論と対人不安意識の間には何か関係があることが考えられた。

また、本研究では被験者から「B型とAB型は信じる」「科学的根拠がないのはわかっているが信じてしまう」などの血液型性格論に関する記述や意見が得られた。これに関して、血液型と性格に関係があると信じてしまう血液型ステレオタイプの傾向がみられ、血液型性格論を支持してしまう理由には、血液型ステレオタイプの影響もあることがわかった。

血液型性格論を信じる人は、人付き合いや他者との良好な関係を築きたいと感じている傾向にあることがわかった。血液型性格論を信じる人の傾向は、この他にも様々なものが考えられ、調べて行くことであらゆる発見があるだろう。

（指導教員 豊村 和真 教授）